

栃木県埋蔵文化財 センターだより

発行 平成23年11月18日
栃木県教育委員会
宇都宮市埴田1-1-20
TEL 028-623-3425
編集 (財)とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
下野市紫474
TEL 0285-44-8441
FAX 0285-44-8445
URL <http://www.maibun.or.jp>

2011
11月
やま
かいどう



CONTENTS

- 市町教育委員会等が実施した発掘調査・整理作業から
甲塚古墳(下野市) 牧ノ内古墳群(小山市)
塚越1号墳(壬生町) 権現山遺跡(宇都宮市)
- 埋蔵文化財センターが実施した発掘調査・整理作業から
興聖寺城跡(佐野市) 星ノ宮遺跡(市貝町)

- 榑崎渡戸古窯跡(足利市)
西刑部西原遺跡(宇都宮市)
- 仲内遺跡の縄文土器を展示
- 特集 古墳時代の豪族居館
- 埋蔵文化財センター一般公開
- ロビー展示から

市町教育委員会等が実施した発掘調査・整理作業から

1. 甲塚古墳(下野市) —古墳に並んだ彩り豊かな埴輪たち—

甲塚古墳は下野国分寺跡の南西に所在します。前方部が短い帆立貝形ほたてがいの前方後円墳で、国分寺の僧兵よろいの鎧を埋葬したという伝承から甲塚古墳という名称がついたといわれています。

この古墳の発掘調査は、現在史跡整備工事が行われている国分寺跡の発掘調査に関連して、平成16年度に実施されました。以前から古墳周辺では埴輪の破片が採集されており、埴輪があることは判っていましたが、墳丘は明治時代の発掘調査で十文字に裂かれており、埴輪もその時に持ち去られてしまったと予想されていました。

しかし、調査を始めると、墳丘一段目の平坦面の中心付近で、埴輪列が発見され、古墳西側の括れ部くび付近から前方部にかけて人物埴輪や馬形埴輪等の形象埴輪けいしょうが多く出土しました。発掘調査時は、バラバラになった状態で出土したため形が良く判らないものばかりでしたが、整理作業を進めて行くうちにその内容が明らかになってきました。

現在判っている埴輪は、人物埴輪などの形象埴輪24体あります。



埴輪の出土状況

古墳の石室側から男子の埴輪が並び、その後ろに女子の埴輪が、列の最後尾には4体の馬形埴輪と馬曳うまひきが並んでいることが判ってきました。いずれの埴輪にも彩色がされており、分析の結果、赤・白・黒・灰の4色たてがみ しっぽが使い分けされていること、馬形埴輪は4体とも白馬で、鬣はたけ・尻尾は灰色、鞍が黒色、先頭の馬の馬鐙には、赤・白・黒の3色が使われていたことが判りました。古墳に埴輪が置かれた当時は、4色で彩られた埴輪が古墳の外側を向いて立っており、華やかに見えたことと思います。

写真のとんがり帽子をかぶり顔が赤彩されている人物埴輪は、調査時は古墳の被葬者ひそうしやと推測されていましたが、整理作業を進めて行くと、鋤を持つ農夫の埴輪だと判りました。これから報告書作成にむけ、配置された埴輪が何をあらわしているかなど解明していきたいと思ひます。



農夫の埴輪

(下野市教育委員会 0285-52-1120)

2. 牧ノ内古墳群（小山市）—古墳工事の現場事務所発見!?—

牧ノ内古墳群は、JR 小山駅の南西 5 km、思川左岸の段丘上にあります。東側には県指定史跡千駄塚古墳（直径 70 m の円墳）があり、牧ノ内古墳群は、その西側に形成された古墳群です。

調査の結果、古墳 5 基、竪穴建物跡 1 棟、住居跡 6 軒が確認されました。調査した古墳のなかには、直径 40 m と大きな規模のものや、河原石を積み重ねた石室で、直刀や鉄鎌などが副葬されていた保存状態のよい横穴式石室がありました。今回の調査で注目されるのが、大形の竪穴建物跡です。幅約 4.5 m、長さが 28 m を超える巨大なもので、カマドが 4 基設けられています。遺構内からは、土師器の杯や須恵器の壺などが出土し、7 世紀のものと考えられます。古墳時代、大勢の人が集い、生活の場として使われていたと推定されることから、古墳造営のための施設ではないでしょうか。



牧ノ内古墳群調査区遠景（東上空から）

（小山市教育委員会 0285-22-9659）



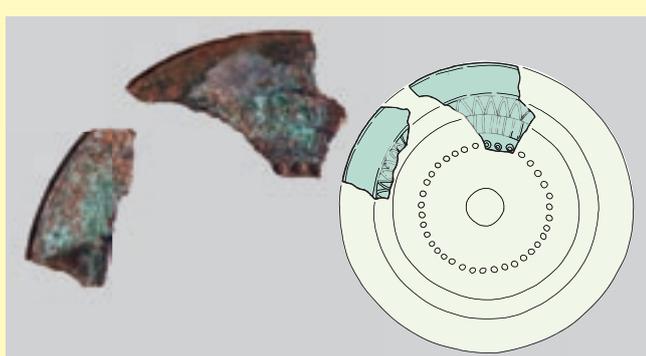
長さ 28m の大型竪穴建物跡

3. 塚越 1 号墳（壬生町）—「みぶの古墳」初の青銅鏡出土—

塚越古墳群は、町の中央部にある国谷地区の台地上に築かれた古墳群です。1 号・2 号は四所神社の境内地にあります。3 号墳は過去の古墳調査の記録などから、直径約 20 m の円墳で「冑や刀」が出土したことが記されています。

今回の 1 号墳の調査は、周溝の一部が町道の拡幅工事にかかるため、記録保存の目的で行いました。その後、墳形と埋葬施設の確認を行うための学術調査を実施しました。当初円墳と思われていましたが、調査の結果、一辺が約 20

m の方墳であること、墳丘の周囲には、幅 6 m、深さ約 1 m の周溝が埋もれていることも確認しました。墳頂部では、埋葬施設の一部（礫郭）と思われる拳大の川原石が集中する地点を 2 箇所確認しました。青銅鏡の破片 2 点は、これらの川原石とともに出土しています。材質や形の特徴



青銅鏡破片（珠文鏡）

から同一の破片で、文様の特徴から「珠文鏡」と考えられます。復元した直径は約 8 cm です。

今日まで「みぶの古墳」については、古墳時代でも後期に属する新しい古墳群と考えられていましたが、今回の青銅鏡の出土により古墳時代中期（5 世紀）から有力者による古墳築造が行われていたことが判明しました。

（壬生町教育委員会 0282-82-8544）



塚越 1 号墳

4. ^{ごんげんやま}権現山遺跡（宇都宮市）^{こうぞくきょかん}—古墳時代豪族居館跡で大型住居跡確認—

新潟大学考古学研究室では、平成23年8月8日から9月6日まで、宇都宮市東谷町に在る権現山遺跡の発掘調査を実施しました。昨年度の調査で、南辺の堀の西側への延長と、南西部の直角に曲がり北に延びている柵列が検出されました。北東部の調査では、想定していた柵列や堀は確認されず、井戸が発見されました。今回の調査では、北東部の堀の延びと居館南西部の北側における遺構分布の確認を中心に計画を立てました。

調査の結果、堀と大型竪穴住居跡、掘立柱建物跡などを確認しました。大型竪穴住居跡は遺跡の西部に位置します。一辺8.9mと大型で、支柱穴は4本。炉の痕跡と考えられる焼土の分布が東部に見られます。南東部には貯蔵穴が位置します。時期は居館の継続時期の5世紀前半に当たります。居館の南部からは3間×3間の一部床東柱つかばしらを伴う掘立柱建物跡が確認されました。ちなみに、大型竪穴住居跡と掘立柱建物跡の主軸は、以前の調査で確認されていた居館の東辺の堀とほぼ平行あるいは直角をなすように見えます。北東辺の堀は長くは続かず、すぐに南西に向きを変えていることが判明しました。

橋本博文（025-262-6449）



大型竪穴住居跡（一辺8.9m）



3間×3間の掘立柱建物跡

埋蔵文化財センターが実施した発掘調査・整理作業から

5. ^{こうしょうじじょうあと}興聖寺城跡（佐野市）—中世城館の堀跡の一部を調査—

興聖寺城跡は道の駅「どまんなかたぬま」から約700m北に位置します。旗川と秋山川に挟まれた低い台地の上に立地しています。

興聖寺城跡は、中世の館跡で、唐沢山城以前の佐野氏の館跡とも言われています。一辺約120mの土塁が方形に巡り、外側に一部堀が残り、現在は興聖寺の境内となっています。今回の発掘調査は、主要地方道佐野田沼線の歩道拡幅工事に先立つもので、幅約2mが調査対象となりました。ちょうど、西辺の土塁の裾から堀にかけての部分にあたります。発掘調査は安全基準を守る必要があるため、約3mの深さまでしか掘り下げることができず、堀の底には達しませんでした。今回の調査で、堀の深さが、現在の地表面から、3m以上あることが確認されましたが、堀の幅は残念ながら判りませんでした。堀に埋まった土の中からは、ガラス瓶や空き缶が出土し、昭和40年代の県道造成工事の際、大きく埋めもどされたことが判りました。



北西上空から見た興聖寺城跡



歩道拡幅部分の調査区

6. 星ノ宮遺跡（市貝町）—中世屋敷跡の掘立柱建物跡と井戸を確認—

遺跡は、文谷城の東、小貝川をはさんで直線約 600 m にあります。星宮神社の東に接し、神社の西は元屋敷、遺跡のある場所は荒屋敷と呼ばれています。

水の豊富な地形で、地面の下 60 cm には滔々と地下水が流れています。ですから、少し深い穴を掘ると、直ぐに水が湧いてきます。中世武士の屋敷地かも知れないこの遺跡には、掘立柱建物が何世代にもわたり同じ場所に建て直され、近くには井戸が二つあります。井戸は深さ 2 m で、調査中はポンプが大活躍です。この二つの井戸からは、同じ時期の土器がそれぞれ出土し、なぜ、一緒に使っていたのかが謎でした。調査すると、一つの井戸は大きさが一回り大きく、白い粘土で埋められていました。遺跡の地面は 1 m 掘ると白色粘土層です。そしてこの粘土は、井戸の発掘の間も、パイ皮をむくようにそげ落ちていきます。つまり、最初の井戸が崩れて大きくなり、使いにくくなると隣に井戸を掘り、その土を最初の井戸に入れて埋め戻しているのです。こうした井戸が 7 箇所以上あります。10 月末の発掘調査終了日まで、まだまだ井戸掘りの日々が続きます。



掘立柱建物跡(20×40mの間に9棟が存在)



新旧の井戸（奥が白色粘土で埋められた井戸）

7. 樺崎渡戸古窯跡（足利市）—県内最古の須恵器窯跡を発見—

樺崎渡戸古窯跡は、足利市街地北東の丘陵裾部に位置する古墳時代の須恵器窯跡です。北関東自動車道建設に伴って発見された遺跡で、窯の中から掻きだした灰や炭、須恵器の破片を捨てた跡（灰原）のみが残っていました。調査の結果、この窯跡は 7 世紀前半（古墳時代後期）に操業していたことがわかりました。栃木県内でこの時期まで遡る窯跡を発掘調査したのは初めてで、古墳時代の須恵器生産体制を解明する重要な資料と言えます。

窯跡から見つかる須恵器は、大きく歪んだもの、焼いた時に裂けてしまったものなど、大半がいわゆる「失敗作」です。また、失敗にイライラしてか、地面にたたきつけたかのように粉々になっているものも多いので、それらを復元したり、実測したりする作業はとても時間がかかります。一方で、失敗作の破片を窯の補強材にしたり、器を並べるための台に使うなど、大切に再利用している様子もうかがえます。遙か昔の渡戸の地で、試行錯誤しながら器を焼いていたであろう工人たちの姿を思い浮かべながら、来年 3 月の報告書完成を目指して一つ一つ大切に作業を進めています。



灰原調査の様子



復元された灰原出土の須恵器

8. ^{にしおさかべにしはら}西刑部西原遺跡（宇都宮市）—鏡よ、鏡・・・—

インターパーク宇都宮南では、開発に先立って11遺跡が発掘調査されました。西刑部西原遺跡もそのうちの一つで、地区の北東にある遺跡です。旧石器時代から中世の生活の痕跡や使われた道具などがたくさん出土しました。ここで紹介するのは中世の和鏡です。平成12年に西刑部西原遺跡の発掘調査を開始するために、表土を取り除いていた時に出土しました。出土した周辺を調査しましたが、中世の遺構などは確認できませんでした。青銅製、直径11.5cmで、背面に2羽の雀と27匹の蝶の文様があることから、「群蝶双雀鏡」と呼ばれ、おおよそ鎌倉時代前半頃のものとして推定されます。中央の紐（つまみのような突起で、ひもを通すための孔があけられている）の上にいる2羽の雀は、向かい合って戯れるように飛んでいます。また、周囲を群れ飛ぶ蝶はすべて中央を向く方向にデザインされています。



群蝶双雀鏡



二羽の雀



蝶

◆ ^{なかうち}仲内遺跡の縄文土器を展示 —日光市“湯西川水の郷”オープン— ◆

7月18日、平家落人の里として知られる湯西川温泉郷に癒しの観光スポット「湯西川水の郷」がオープンしました。「湯西川水の郷」は、湯西川ダム建設で水没する地域に、水源地域のシンボリック施設として建設され、その一角の「湯西川くらしの館」には、埋蔵文化財センターが発掘調査した仲内遺跡の遺物が展示されています。縄文時代中頃（約4,500年前）の湯西川の人々が福島県や新潟県の人々と盛んに交流していたことを示すたくさんの縄文土器や硬玉製大珠（ヒスイ製の胸飾り）、石鏃・石槍・石皿などの各種石器が展示されています。

（湯西川水の郷

0288-98-0260）



湯西川くらしの館



展示された仲内遺跡から出土した縄文土器

古墳時代の豪族居館

栃木県内で発見された豪族居館

豪族居館とは



①古墳時代の豪族の姿（複製）

西暦 200 年代の半ば頃から 400 年以上続いた古墳時代。この時代に、民衆とともに農業や漁業に携わり、大形の前方後円墳に葬られた地域のリーダーを豪族と呼びます。そして、豪族たちの日々の生活や、政治活動の拠点として使用したのが豪族居館です。



②日本初の豪族居館の調査（群馬・三ツ寺 I 遺跡）



③建物が表現された鏡（複製）（奈良・佐味田宝塚古墳）



④埴輪にみる建物配置の例（複製）（群馬・赤堀茶白山古墳）

豪族居館の調査・研究は、1981 年に発見された群馬県三ツ寺 I 遺跡の居館から始まります。これ以前は、群馬県赤堀茶白山古墳の家形埴輪や奈良県佐味田宝塚古墳出土の鏡に描かれた建物などからその姿を想像していたにすぎませんでした。

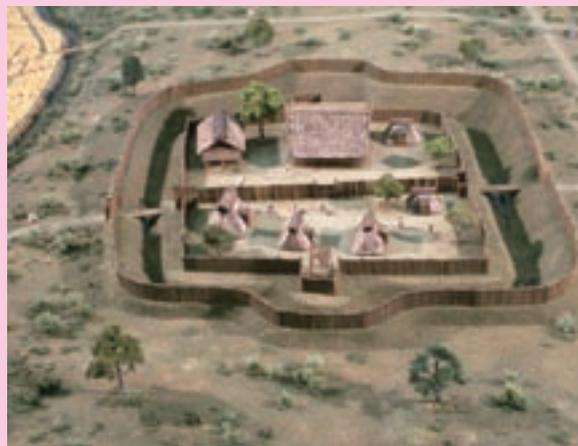
これまでの研究で、豪族居館の多くは方形で、溝の内側に柵や建物を持つことがわかってきました。建物は、豪族の住まいや、儀式の場と考えられます。広い空間は、多くの人を集めた場所であったのでしょうか。

建物や柵の数、配置などは居館によって異なるため、その姿はさまざまです。



豪族居館の一例（矢板市堀越遺跡）

1 四斗時遺跡（さくら市）



〔前期（4世紀）1号：方形 39×47m（張出部を含む）2号：方形 43×52m〕東西に並ぶ2基の居館。写真は1号の復元模型で、溝と柵に囲まれた内部がさらに柵で仕切られます。また、南北に張出部、東西には入口があります。

5 成沢遺跡（小山市）



〔中期（5世紀中葉）方形かコの字形 南北 57m〕西側は削られています。溝の内側に柵と5軒の竪穴住居跡があります。

6 下犬塚遺跡（小山市）



栃木県では、昭和 60 (1985) 年から豪族居館の発掘調査が始まり、現在までに6遺跡7基が発見されています。市町ごとに見ると、さくら市2、矢板市1、宇都宮市1、上三川町1、小山市2と、県内各地にあることがわかります。

しかし、豪族の墓である大形の前方後円墳や前方後方墳の数に比べると、見つかった居館の数は少なすぎます。県内には、発見されていない豪族居館がまだまだたくさん眠っているのかもしれませんが。

ほりこし 2 堀越遺跡 (矢板市)

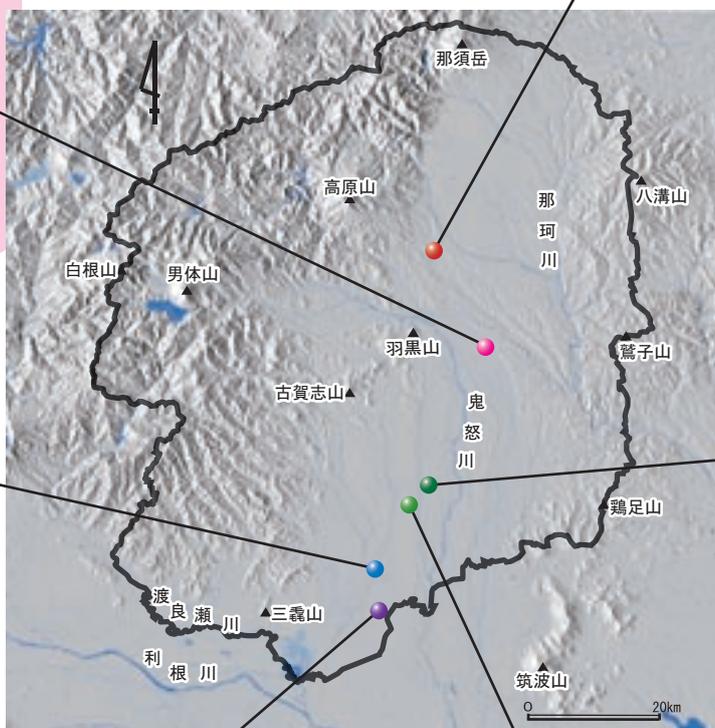


溝から出土した土器

〔前期 (4世紀) 方形 50×48m〕 断面逆台形の溝の内側に、柵と一辺 8m を超える大形の竪穴住居跡があります。溝からは、表面が赤く塗られた土器が多量に出土しました。

ごんげんやま 3 権現山遺跡 (宇都宮市)

〔中期 (5世紀中葉) 方形か 南北 100m〕 断面逆台形の溝と柵が巡る、県内最大の豪族居館です。北東角が直角ではなく斜めなのが特徴で、内側には掘立柱建物跡があります。遺跡周辺にある笹塚古墳や鶴舞塚古墳などの大型古墳に葬られた豪族が使用した居館と推定されます。



とのやま 4 殿山遺跡 (上三川町)

〔中期 (5世紀) 長方形 50×60m〕



溝に突出部があります。西辺と北辺西側のものは内から外へ、東辺と北辺東側のものは外から内へと突出します。北辺西側の突出部には橋脚があった可能性があります。遺構は、柱穴4本と竪穴住居跡1軒のみです。

〔前期 (4世紀前葉) 形状不明 確認部分 25×35m〕 直角に曲がる溝と竪穴住居跡が見つっています。溝は断面 V 字形で、環濠集落とも考えられています。



古墳時代の権現山遺跡周辺

◆埋蔵文化財センター一般公開◆

7月29日（金）・30日（土）の2日間、埋蔵文化財センターの一般公開を行い、116名の参加者で賑わいました。今年は見学コースを一般と親子に分け、埋蔵文化財センターの仕事と収蔵遺物などを見学して頂き、親子コースでは最後に、火おこしに挑戦しました。特別収蔵庫では、縄文時代から古墳時代の耳飾りを展示し、勾玉づくり・拓本・縄文施文・土器パズル・注記などいろいろな体験をして頂きました。



注記体験



耳飾り見学



縄文施文



勾玉づくり



火おこし

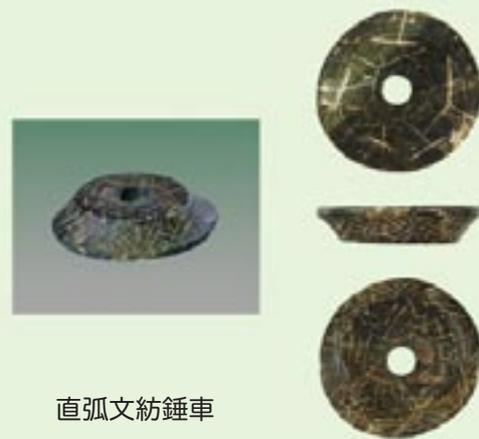
ロビー展示から

当センターが保管する遺物について、栃木県総合文化センターと埋蔵文化財センターのロビーで展示を行っています。近くにおいでの際はお立ち寄り下さい。

ちよっこもん ぼうすいしゃ 直弧文の彫られた紡錘車 —権現山遺跡—

権現山遺跡は、これまで「インターパーク宇都宮南」や北関東自動車道の建設に伴う発掘調査で、古墳時代の豪族居館跡のほか、たくさんの竪穴住居跡、掘立柱建物跡・古墳などが発見されています。周辺には、県指定史跡の5世紀中ごろに造られた大型前方後円墳（墳長100m）、笹塚古墳をはじめ、大小円墳が群在しており、百目鬼遺跡・杉村遺跡などたくさんの集落跡も確認されており、古墳時代中期社会を考える上で、モデルケースとなりうる地域です。

この直弧文という特殊な文様が彫られた紡錘車は、県道雀宮・真岡線の改良工事の発掘調査で竪穴住居跡から出土しました。紡錘車は、繊維に撚りかける時の弾み車で、石を材料に作られています。この模様は、魔除けなどの意味があると言われています。奈良時代には布を神前に捧げる儀式があり、その前の時代にも、この神聖な紡錘車に巻かれた糸が、神前に捧げられていたのかもしれない。



直弧文紡錘車



栃木県総合文化センターロビー展示

埋蔵文化財センターの見学・体験学習・職場体験等のお申し込みは
ホームページ <http://www.maibun.or.jp> をご覧のうえ普及事業担当まで TEL 0285-44-8441

